

## 子どもの困り（分からない・参加できない・できない） を支援するために ～ LDの子どもたちに対する支援を考える ～

### 特別支援教育の対象となるのは

前号で紹介しました「教育上特別な支援を必要とする子ども」の対象は、法令改正の中では『LD, ADHD, 高機能自閉など』と掲げられています。文中の『...など』は大きな含みのある部分で、おそらく学校現場毎に実際の子どもに対応しているいろいろな軽度障害が加わることになると考えられます。

そして今後の課題となる特別支援教育の中身(内容)は、理想的には支援のスタイル(例：どこで学習するのか...通常学級or育成学級or通級学級orさまざまな組み合わせ)を始めとした対象となる子どもの全生活への支援なのですが、もう少し具体的に現実の学習を考えますと、

- ・コミュニケーション
  - ・ソーシャル・スキル
  - ・特異な学習の困難
- の3領域が上げられ、研究もすすめられてきています。

中でも、表題にもしています子どもの困りの一つ『分からない』の原因となる「特異な学習の困難」を支援することは、「分からなさ」の研究が相当程度進んできている今日、個々の対象となる子どもの状態に応じて支援のための学習の計画を立て、教材を準備しようという段階にまで来ています。

### 特異な学習の困難がある = LDって

LDの主たる症状として文部科学省が定義(1999)していますのは、「聞く、話す、読む、書く、計算する、推論する能力のうち、特定のものの習得と使用に関する、著しい困難に限定する。」とあります。

上記の6つの能力のうちで「読む」を例に採り、特異な困難の状態を幾つか上げますと

ひらがなやカタカナが、なかなかおぼえられない。

1年の夏休み前でまだ数文字しか覚えられていない。

しばしば、語句や行をとばして読む。

(教科書)知識や考え、思いを伝え合うことができるのは、文字のもつ大きなめぐみです。



(読み)「知識や考え、思いを伝えることができるのは、文字の大きなめぐみです。」

しばしば、付け足しや、読みとばしがある

(文)

(実際の読み)

付けたし : 生まれました

生まれてきました

読み飛ばし : 始まりにまで

始まりまで

しばしば、形のよく似た文字を読み間違える

ローマ字で「d」「b」「p」が子音のとき、混乱して読み誤る。

「da」を「パ」と読んだり「バ」と読んだりする。

「pe」を「デ」と読んだり「ベ」と読んだりする。

意味の関連のある漢字を読み誤る。

「町」を「むら」、「入る」を「でる」、「胃」を「ちょう」、「時期」を「きかん」

・・・などなど

### 「読み書き」の困難はLDの学習の大きなテーマ

例として上げました「読む」は「書く」と大きな関連をもつことから、「読む」の苦手な子どもたちの多くは「書く」にも困難をもつことが多いです。そして、この「読み書き」に困難があると、国語の学習が「分からない」と感じることに止まらず、「読み書き」が全ての教科に関わる基礎であるだけに、国語・算数だけでない全ての教科に「分からなさ」を育ててしまうこととなります。『LDの学習は読み書きの問題に始まり、読み書きの問題に終わる。』と言われるように「読み書き」に対する学習の支援は特別支援教育の重要なテーマになっています。

今回は「読み書き」の困難に対する教材例を例示して考えます。以下次号で...